

SPACE No.39

日本臨床心理身体運動学会会報第 39 号 2022 年 3 月 7 日

編集発行 日本臨床心理身体運動学会 会長 山中康裕

【第 22 回大会・23 回大会特集号】

コロナ禍の中、昨年度はこの日本臨床心理身体運動学会も大会は延期になり、今年度も他の学会は開催されても遠隔、オンラインとなり、“学会に参加する”という醍醐味を感じられない状況が続いていました。しかし本学会は今年度、第 23 回大会を松本大学を舞台にオンサイト・オンラインのハイブリッド形式で無事に執り行うことが出来ました。久しぶりの学会大会ということもあり、不安と期待が入り混じりつつではありましたが、普段からなかなか十分には行えないさまざまな発表とディスカッションの場となったのは何よりだったと思います。大会開催に尽力してくださった大会実行委員長をはじめ、発表者の皆さんのコメントを頂きました。

併せて遅くなりましたが、3 年前の新潟医療福祉大学主催の第 22 回大会の大会についてのコメントも掲載させていただきます。新潟の時は懇親会も開催され、アフターカンファもできましたね。その頃が懐かしいです。

学会の際のさまざまな感覚、思い、感動を思い返し、振り返っていただければと思います。

〔第 22 回大会〕

【日本臨床心理身体運動学会第 22 回大会 大会報告】

山崎史恵（新潟医療福祉大学）

令和元年 11 月 30 日（土）12 月 1 日（日）の 2 日間、日本臨床心理身体運動学会第 22 回大会が新潟市（ガレッソホールほか）にて開催されました。

テーマは「行・鍛錬・修練—日本的なところとからだ—」。スポーツ領域において科学的かつ分析的な心身のトレーニングが益々推奨される昨今において、日本で脈々と受け継がれてきた過酷な身体経験の意味を今一度、相対化・意識化する機会を持ちたいという想いから企画しました。本学会会長である山中康裕先生の「書」から広がるご講演を核に、シンポジウムでは司会の中込四郎先生、討論者の山中康裕先生、木宮敬信先生、中島登代子先生、名取琢自先生、高橋幸治先生の 6 名の先生方による修行、スポーツ、武道等のご経験と臨床心理の専門性が交差する議論がなされ、大変濃厚な時間となりました。基調講演およびシンポジウムの様子は、既に『臨床心理身体運動学研究』第 23 巻第 1 号にてまとめられていますので、ぜひご一読いただければと存じます。

プログラム内容は、1 日目に事例研究発表 2 演題、一般研究発表 4 演題、懇親会が行われ、2 日目にはワークショップ 4 つ、総会、基調講演・シンポジウムにて幕を閉じました。大会参加者は 111 名（正・一般会員 56 名、準会員 14 名、非会員 41 名）、懇親会参加者は 47 名でした。ご発表いただいた先生方、座長および指定討論者をお引き受けくださった先生方、ワークショップ講師をご担当いただいた先生方、協賛いただいた企業・団体の方々にはこの場をお借りして深く御礼申し上げ、参加者皆様のご協力により本学会大会が無事開催されたことに心より感謝申し上げます。

最後に実行委員会のメンバーについて触れさせていただきます。新潟医療福祉大学の教員および大学院生の学会員を中心に、古谷学先生、長岡由紀子先生、木村佐枝子先生、坂中尚哉先生、前田章先生、山本幸代先生に実行委員に加わっていただきました。当日までの準備における実務的な手続きの多くは、新潟医療福祉大学の中島郁子先生、吉松梓先生が担当され、山崎研究室の大学院生や学部生にもサポートをしていただきました。実行委員の各先生方には、各会場における統括や運営においてご協力・ご指導・ご助言をいただき、また特に学会事務局（木立の文庫）様の多大な支援を受けて本大会が運営できたことを記しまして、感謝の意とさせていただきます。

【一般研究発表を行って】

伊藤麻由美（京都文教大学大学院）※

（※本稿は伊藤先生より学会大会が開催された 2018 年にいただいております。そのため、伊藤先生のご所属は 2019 年度当時のままにさせていただきます。編集委員註）

2019 年 11 月 30 日・12 月 1 日の二日間、本学会第 21 回大会が新潟にて開催されました。そこで私は、一日目の一般研究発表において、受傷アスリートの心理変容過程について発表させていただきました。

今回の発表に先立って、インタビューをさせていただいた方にどのような影響をもたらしたのか、何ができただのか、ということを考えるようになり、検討をする必要性を感じていました。本学会で発表をすることはとても勇気のいることでしたが、山崎史恵先生と名取琢自先生に背中を押していただき、今回発表をさせていただきました。

発表では、これまで受傷アスリートに継続的にインタビューをしてきた内容を発表させていただきました。発表を通して感じたことは、インタビューをしながら、怪我からいつ復帰できるかわからないという先の見えなさを、私自身も感じており、その不安に向き合うことができていなかったということでした。受傷体験による成熟の重要性を抱きながらも、復帰することを前面にしたインタビューが展開され、復帰への不安を扱っていくことの難しさを痛感しました。また、指定討論者の前田正先生には、バウムテストに表現された受傷アスリートの様相を検討していただき、自己実現へ向けて取り組む中で語れないところ・意識化されなかったところがあったのではないかとご教示いただきました。受傷アスリートの「語り」を丁寧になぞっていくためにも、語られなかったことの意味や、そこで何を体験していたのか思いを巡らす必要性を感じました。どのような研究調査においても、そこで生じる関係性を無視してはならないと再認識させられました。

今回の発表を通して、厳しく、そして暖かく見守ってくださる本学会の雰囲気を感じ、発表をして良かったと感じております。この場をお借りして、座長の武田大輔先生、指定討論者の前田正先生、またフロアでご意見いただきました諸先生方に、心からお礼申し上げます。ありがとうございました。

[第23回大会]

【学会大会を終えて】

第23回大会実行委員長 齊藤 茂（松本大学）

第23回大会は令和3年12月4日から5日にかけて、「たましいの露れ」という大会テーマのもとにオンサイトとオンラインによるハイブリッド方式で開催させていただきました。先生方もご存じの通り、本来であれば本学会大会は一昨年の12月に開催されるはずでしたが、今般の新型コロナウイルスの影響で1年後へ延期しての開催となったわけです。その間、「学会自体、開催できるのか」「対面で開催できるのか」「それらはいづれ誰が判断するのか」「対面で開催できなかったら、どうする?」、ハイブリッド開催を決めてからも「オンライン配信はトラブルなくできるのか」「遠方のご高齢の先生方のサポートは誰がするのか」「果たしてオンラインで真意は伝わるのか」等々、私の中では不安や迷いが尽きませんでした。今になって思い返してみると、新型コロナの影響も大きかったのですが、私のコミットの問題であったように思います。

そんなところへ、いわゆる第5波の真ただ中であつたように思いますが、高橋理事長から「たとえコロナの状況が最悪になっても、ワークショップとシンポジウムは出演者は対面でやりたい」「実現できる根拠のない自信がある」という旨のメールをいただきました。私の中でも、「一生に一度のことなのだから、せっかくならやりたいことをやっておこう!」「山中康裕先生や岸本寛史先生、シンポジストの先生方には是非とも松本大学へ来ていただいて対面でワークショップやシンポジウムを行いたい、そして多くの先生方にそれを味わっていただこう!」という思いが、確固たるものになった瞬間であつたように思います。

第23回大会の開催時期は、今般の第6波の真ただ中にある現状を考えると不思議なほどに感染状況も落ち着き、無事に学会大会を終えることができました。大会参加者数は117名、2日にわたり62名もの先生方に会場へお越しいただきことができました。また、同時にオンライン配信を行い、おそらくは55名を超える先生方にご参加いただくことができました。オンライン参加は利便性も高く、会場までお越しいただくことが困難であつた先生方にもご参加いただくことができたのではないかと思います（こちらの配慮が足りずに不満の残る配信になってしまったことは、この場をお借りしてお詫び申し上げます）。なお、今回のオンライン配信は業者さんに入っていたいたのですが、大会前3日間にわたり機材や配信のチェックが必要でした。また、ご一緒する業者さんには本学会がどのような学会でどのようなこだわりがあり、加えて本領域の世間一般とは異なる性質等についても理解していただかねばならず、さらには会長の山中康裕先生や中島登代子先生がどういう方で...と、こうしたことまで共有し綿密な打ち合わせをさせていただいたうえで当日を迎えました（学会終了後、私が打ち合わせの際に一見どうしても良さそうなことになぜそんなにこだわっていたのか、配信業者の方々は腑に落ちたような顔をされていまいました!）。特に本学会は一筋縄ではいきませんから、オンライン配信を行う場合には、業者さんとの連携は大変重要です。配信（印刷もなのですが）をご担当いただいた成進社さんには本当にたくさんの無理を聞いていただき、さらには協賛金までいただきました。本当に感謝しかありません。

長くなってきましたが、もう2つ3つ書かせてください。まず、2日間の信州弁当はエア・ウォーター東日本さんに作っていただきました。ご了解も得ないままに「信州弁当」と第1号通信に掲載してしまったにも関わらず、信州のものだけで作ってほしい!というわがまを全面的に聞いていただき、学会大会1週間前には試食会まで開いていただきました。試食会后、「これは信州のものではない!」と何品かの入れ替えまでしていただきました。なお、エア・ウォーター東日本さんには大会プログラムに広告も出していただきました。次に、大会プログラムの表紙やポスターに使わせていただいた風景の写真は、実は長野県白馬村出身のノルディック複合選手、渡部暁斗くんにご提供していただ

きました。彼は今冬の北京オリンピックでは日本選手団の旗手を務め、この文章をまとめていただきに本日、3 大会連続となるメダルを獲得しました！同じく、大会プログラムの表紙やポスターに使わせていただいた書は、本学の柄山明珠さん（雅号）に書いていただきました。実は大会プログラムの表紙やポスターのデザインも彼女によるもので、当日の看板やいくつかの広告に至るまで仕事の合間をみながら（というか最優先で！）、お忙しい中こころよく作成していただきました。そして最後に、大会を支えていただいた大会実行委員の皆様、本当にありがとうございました。学内の実行委員はごく数名で、常葉大学大学院の同窓生を中心に各地からお集まりいただきました。実質の実行委員会活動は学会大会前日の夕方からだったにもかかわらずチームワークは抜群で、何から何までどうにかしていただきました。お手伝いの学生たちも大変お世話になりました。

ここに書き切れていない方もたくさんいらっしゃいますが、多くの方々に支えられて第 23 回大会を終えることができました。久々に、新型コロナウイルスにより遠ざけられていたものを体験できた、前日準備からの 3 日間であったように思います。新型コロナウイルスの終息を願いながら、このあたりで御礼の挨拶を終わらせていただこうと思います。

【一般研究発表の場をいただいて】

野澤珠実（静岡県スクールカウンセラー）

松本へ向かう朝。TV をつけたら飛び込んできた速報の文字。山梨で震度 5。あ、神々が移動を始めた一出雲に集まる神々のごとく、全国各地から、臨床心理の神々が松本への移動を始めたのだと思いました。このような大会に参加できること、そして、その場で発表させていただけることが恐れ多く、震える思いでアクセルを踏みました。

オンサイト&オンラインのハイブリッド開催となった今大会。準備も手間も二倍以上。前日準備の現場には、緊張感が…と思いきや、そこには、興奮、高揚感が満ち溢れていました。私も今回は、発表と実行委員のハイブリッド…とは口だけ。会場準備に奔走するみなさんの横で、自身の発表準備に終始してしまいました。ただ、その場の空気を共有できたものとして、このチームの素晴らしさを伝えずにはられません。

大会委員長の齊藤茂「先生」とは、常葉大学大学院の同期として学んだ者同士、気楽な友人という間柄でしたから、この素晴らしい大会を成功に導く姿には、ただただ圧倒され、気軽に「齊藤さん」などと呼べないような気持ちになりました。とはいうものの、やっぱり齊藤「さん」と呼びたくなるのが、齊藤先生の素晴らしさなんだろうと、だからこそ、チーム齊藤のメンバーは温かくて、仕事ができ、楽しかった。毎日、遅くまで走りまわり、疲れもピークに達しているはずなのに、だれもが笑顔で、どんな無理難題にもなんとか対応しようとする…齊藤先生が常日頃から、そうやって、一人ひとりのために奔走していることが伝わってきました。「実行委員」として私にできることは、開会直後の発表に全力を尽くすこと—その思いで挑んだのですが…。

このような場で発表させていただくのは初めてのことでした。いつもの大きな声が出なくなるほど、緊張でいっぱいになってしまいました。手は震え、頭は真っ白になり、先生方にいただいた質問にも、まともに答えられませんでした。その後の先生方の発表をお聴きして、多くを学ばせていただき、大いに反省しました。いつかまた、機会をいただけるように、そして、その時は、もう少し、落ち着いて応答できるように、精進していきたいとの思いを強くしています。本当に貴重な機会をいただき感謝しております。

齊藤委員長の最後の挨拶をにこやかに見守られる、壇上に並ぶ先生方。それはまるで、宝船の七福神のごときさま。後光がさすようでした。山中先生からいただいた「ウィルス」というよりは「酵母」のようなものを大事に育てながら次の一年を過ごしたいと思います。

コロナ禍の中、実際に会えることの意味を、人が動くときに揺れる空気の価値を、大きく、愛おし

く感じながら過ごせた二日間でした。

座長の中込四郎先生、指定討論者の名取琢自先生をはじめ、本大会にかかわってくださったすべての先生方、大会を支えてくださった「チーム齊藤」のみなさまに、心より感謝申し上げます。また、お会いできるその日まで、みなさまどうぞお元気でいらっしやいますよう。本当にありがとうございます。

【事例研究発表を体験して】

中島 郁子（新潟医療福祉大学）

SPACE 前号でも特集されていましたが、コロナ禍のこの 2 年弱、公私さまざまに変化を強いられました。なにより、「人と会う」ことについて、何度も考えさせられました。「会う」人も、お互いに選択せざるを得ない毎日でした（今も）。カウンセリングは、出会うことから始まる実感があります（出会う前から“はじまっている”ような感覚を味わうこともあります）。それなのに会うことが許されない日々をどうしたものかと、もんもんとしながら過ごしていました。Zoom や LINE や Teams などのリモートも、まずは知人や部活の学生たちといろいろと挑戦してみました。飛行機でも半日はかかる国の友人とも顔を見てリアルタイムに話せるのは、何とも言えない嬉しさがあったり、学生たちが多彩な機能を駆使し、工夫しながら数十人での Zoom の中で上手に全体を動かしていけるようになっていくのを目の当たりにするとワクワクしました。できることは多かったです。でも、それでもやっぱり足りない…、という違和感も消えませんでした。

2020 年度の本学会大会が延期になったことは、やむを得ないことと重々承知しながらも残念な思いが大きかったです。本学会は、筆者にとって、勝手に育ててもらっている場だと思っています（心身ともに笑）。癒しの存在として生きている先生方がこんなにも集うこの学会に、会員の一人でいられることを誇りに思いますし、自分もそんな存在に近づけるといいな～という思いもあります。今回、同じ門下でもある齊藤茂先生が、実行委員長の大役を、しかも結果的に 2 年間にわたって背負われたことは、筆者にとって他人事ではありませんでした。今大会で、発表したい！と思ったのは今年の春を過ぎてからでしたが、手を挙げてやっぱりよかったというのが、本当に正直なところです。

事例研究発表は、筆者にとっていつも不思議な時間です。何時間も何日もそのクライアントのことを考え、何か月も何年もかけて記録をまとめ、いろいろと想像しながら準備を経て発表に至ります。それなのに、それまでの想像をはるかに超えてディスカッションが広がっていき、思いもよらない世界を体験する…。今回、こんなにも剣道とはなんたるかについて、考えを巡らせるなんて思いもよりませんでしたし、それはそのまま心理臨床とはなんたるかということと、筆者の中では切り離せない感覚がありました。事例発表の 3 時間が、ワクワク、ゾクゾクしてたまらなかったのは、想像もできなかった世界をみたからかもしれません。自分自身のイメージなのに、自分では言語化できていなかったところを、コメントをいただいたことで言葉が紡ぎ出されていきました。見えていない部分、言葉になっていなかったところが、多くの先生方のコメントから明らかになった感じがします（特に仁里先生、岸本先生のコメントは刺激的でした。ここにお名前を記して感謝の意を表します）。筆者にとってかけがえのない有意義な時間になりました。

今回、本学会初のハイブリッド開催となりました。前日から会場の様子を少し拝見していましたが、2 つの別の学会を同時に開催しているような手間だと感じていました。筆者自身は、会場での配布用とオンライン用の発表資料を別々に作成しました。参加者を 3 パターン（会場で資料を読む、会場でスクリーンをみる、オンライン参加）でイメージしながら準備したので、やはり 2 つの学会で同時に発表するような感覚でした。

アフターコロナの新しい時代の心理臨床と研究を考えるにあたっても、これ以上ない経験をさせていただいたと思っています。このような貴重な機会をいただいたことはもちろん、当日発表会場で、

筆者の拙いプレゼンテーションを2つの会場にフィットするように導いてくださった座長の木村佐枝子先生、また、剣道の神髄についてご教示くださった指定討論者の前林清和先生、全体を視野に入れながらイメージが広がるコメントをくださいました高橋幸治先生、3人の先生方には本当に心から感謝申し上げます。

また、最後になりましたが、齊藤先生をはじめ、実行委員の先生方、厳しい状況での大会開催は本当にお疲れさまでした。夏の終わりのある日、実行委員長から「おめでとうございます。あなたは実行委員です。」という、フィッシング詐欺のようなメールが届き、筆者も名を連ねていたのに（忘れていたわけではないのですが笑）あまり力になれず、反省ばかりです。また次の機会にはしっかり仕事しますので許してください（笑）。今回の体験を糧に、今後の臨床と研究にますます精進していきたいと思います。ありがとうございました。

編集後記

学会大会の場で、先生方のご発表やご意見などをお聞きしながら、「学会ってこうよね」と思っている自分がいました。普段の自らの臨床や指導や研究のあり方を振り返り、視点を深めたり、新たな視点を頂いたりして、もっと頑張ろうと思えるのが学会大会です。このような学会に所属出来ていること、このような学会大会を先生方が開いてくださっていることに感謝です。来年度も、第24回大会が西九州大学で無事に行えることを祈りつつ。

（仁里 文美）

SPACE No. 39

日本臨床心理身体運動学会 会報第 39 号

2022 年 3 月 7 日発行

日本臨床心理身体運動学会

会 長 山中康裕

編集責任 仁里文美

事務局 〒600-8449

京都市下京区新町通松原下ル富永町 107-1

株式会社 木立の文庫内

TEL : 075-585-5277

FAX : 075-320-3664

E-mail : office@rinsinsin.jp